

417 腹膜漿液性乳頭状腺癌のクロナリティ解析

大阪府立成人病センター，大阪市大病理部*
中嶋竜一，八幡朋子*，池淵佳秀，尾崎公巳

〔目的〕腹膜に発生する漿液性乳頭状腺癌 { Papillary Serous Carcinoma of the Peritoneum (PSCP) } は女性のみにもまれ、組織学的に卵巣漿液性腺癌と区別できない腫瘍が腹膜表面にびまん性に認められるが卵巣は正常ないしごく表層のみに認められるものと定義される。PSCPの発生起源として、ミューラー管由来の腹膜細胞が同時に多発性に癌化したという説と、単一細胞由来の癌細胞が腹膜播種し広がったという説があるが、未だ結論を得ていない。我々は、X染色体の不活化のパターンを解析することによりPSCPの発生機序を明らかにすることを目的とした。

〔方法〕4症例のPSCPについて開腹時に腹膜表面の腫瘍数箇所よりsamplingされた薄切パラフィン包埋切片よりDNAを抽出し、各DNAよりX染色体上に存在するAndrogen Receptor遺伝子のExon1のCAG tandem repeatを含む領域をPCR法にて増幅し変性ポリアクリルアミドゲルにて電気泳動した。また腫瘍DNAをメチル化認識制限酵素HhaIまたはHpaIIにて切断後同様に処理し増幅領域のメチル化パターンを検出することによりX染色体不活化の解析を行った。

〔成績〕今回検討を行った4症例のうち3症例において、腫瘍組織DNAをHhaIまたはHpaIIで切断後のPCR産物はそれぞれの症例ごとに同側一方のみの増幅を認め、これら3症例の腫瘍組織はいずれも同側のX染色体が不活化されていた。しかし1症例において採取部位によって異なるX染色体が不活化されていた。

〔結論〕びまん性増殖を示すPSCPのなかには多発性に癌化したものがある。

418 婦人科悪性腫瘍におけるFlow cytometry (FCM)を用いたKi-67/PCNA 分析による増殖動態と臨床悪性度に関する基礎的研究

千葉大学医学部産婦人科
杉田道夫、三橋 暁、高野 始、関谷宗英

〔目的〕FCMによるDNA ploidy分析が盛んに行われているが、未だに悪性度、予後との相関に結論は得られていない。その原因として同じDNA量を有する細胞にもheterogeneityがあり、DNA量だけでは悪性腫瘍の増殖動態を正確に表せない点が指摘されている。そこで、従来のDNA分析にKi-67、PCNAを追加し、正確で迅速な増殖動態を把握することを目的とし、両者の相関、stageとの相関、aneuploidyの有無との比較を行い、その有用性を検討した。

〔方法〕正常内膜細胞：15例、正常頸部細胞：8例、頸部境界病変：7検体／7例、子宮頸癌Ib期：13検体／10例、頸癌IV期：3検体／2例、卵巣癌I期：2検体／2例 卵巣癌II、III期：6検体／6例、内膜癌3例を対象とし、新鮮材料を採取し、測定まで冷凍保存。解凍後、コラゲナーゼ中にて細切、PFA固定し、次にTriton-Xにて裸核処理した。染色はFITC標識Ki-67抗体、PCNA抗体を用いて直接蛍光抗体法を行なった。

〔成績〕1)Ki-67とPCNAの相関では、相関係数が0.636で強い相関はなかった。2)正常内膜においては増殖期と分泌期ではKi-67、PCNAともに増殖期に陽性率が高かった。Ki-67では、増殖期と分泌期で、 $P<0.005$ で有意の差が認められた。3)悪性腫瘍のstageとKi-67、PCNA陽性率との比較ではstageが進むにつれ高くなる傾向はあるが有意差はなかった。4)Ki-67、PCNA陽性率とploidyとの相関ではaneuploidy群のほうがKi-67は高い傾向が認められた($p<0.05$)。〔結論〕Ki-67、PCNAともに増殖状態を反映しているが、Ki-67の方がより正確に表していると考えられた。DNA ploidy 分析にKi-67を加えることはより正確な増殖状態に関する情報が得られる。